

知的障害があり、行動問題がある自閉スペクトラム症者の父親による家族への関わり方の変容プロセス^{※1}

- 父親へのインタビューを通して -

黒木 八恵子^{※2}

本研究の目的は、知的障害があり、行動問題がある自閉スペクトラム症者の父親による家族への関わり方の変容プロセスを明らかにすることである。18歳以上の子を持つ父親9名にインタビュー調査を実施し、M-GTA (Modified-Grounded Theory Approach, 以下M-GTAと記す) を用いて分析を行った。その結果、父親による家族への関わり方の変容の過程は、【父親こそ出来る行為を積む】と【家庭に合った育て方を見出す】を繰り返す中で、家族が安定した生活が送れるように、それまでの父親の考え方や行動の仕方を変容し、組み立てていくという《生活安定のためのスタイル構成》プロセスであることが明らかになった。また、これらは、【抛り所がある】に下支えされていたことが分かった。

キーワード：行動問題、自閉スペクトラム症、父親、関わり方、半構造化面接

I. はじめに

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder, 以下ASDと記す) 者と暮らす家族は、その他の家族と比べて高いストレスを有している、といわれている。ASD者の中には、他傷や自傷、衝動・多動性、強迫的行動、かんしゃく、感覚過敏等といった症状がみられ、これらは、ASD者と暮らす家族の生活に深刻な混乱をもたらしている。そのため、ASD者の家族に対しては、ASD者の行動や特性とそれらへの対応方法に関する適切な情報、また、それらについて学ぶ機会を提供することの必要性が指摘されている (柳澤, 2012)⁹⁾。

行動問題のあるASD者の家族への介入に関しては、母親を対象とした研究報告が主である。その多くが、学校や大学等の専門機関と家族との協働による取り組みや行動分析の手法を用いたものであり、行動問題があるASD者の母親の子育て

に関する研究は、ほとんど見当たらなかった。そのため筆者は、知的障害があり、行動問題があるASD者の母親へのインタビューを通して、母親の子どもへの関わり方の変容プロセスを報告した。母親は、【子どもに合った対応を追求する】【子どもが安心する対応を理解していく】【子どもに合った対応を認識していく】という《子どもに必要な関わりが分かってくる》を何度も繰り返すことによって、【生活しやすさを培う】に至っていた。またそれらは、【抛り所がある】に下支えされていたことを示した (黒木, 2020)⁵⁾。

一方、ASD者の家族に関しては、父親が母親の負担軽減に重要な役割を担い、父親の役割遂行への支援が重要であるといわれているものの、父親の役割遂行に関する研究報告が少ないことが指摘されている (飯田ら, 2016)²⁾。そのような状況ではあるが、父親を対象とした先行研究としては、以下の報告がある。

三原 (2004)⁶⁾ は、ASD者の家族状況を、2人のASD者の父親との面接を通して明らかにしている。父親は元小学校教員であり、ASDの息子達の状況を理解し、母親を助けており、それ程強い精神的負担を受けていなかった。父親の時間的余裕や仕事の種類が、子どもへの関わりに関連してくるかもしれない、と述べている。ま

※1 The process of transformation in the relationship between fathers and their family with Autism Spectrum Disorder with mental retardation and behavioral problems

※2 北九州市発達障害者支援センター

た、両親を精神的にサポートするカウンセリングや、親の会の重要性について指摘している。岡野ら(2012)⁷⁾は、学童期のASD児の母親のストレスと父親のサポートについて、夫婦40組を対象に調査している。母親は父親に対して、母親のみではなく子どもに働きかけるサポートも求めているが、父親は母親へのサポートの必要性は認識しているものの、子どもへのサポートは認識していなかったことを報告している。今西(2013)³⁾は、父親が子どもに向き合う中で、どのような経験を積み上げているのかを明らかにするため、3人の父親へインタビュー調査を行っている。父親は育児姿勢の変化だけでなく、父親自身を柔軟に変化させ成長していた。子どもの特性に向き合い、関わろうとするが上手くいかない経験をしており、また、父親なりに母親へ協力し、仕事重視の生活を調整する中で、父親の役割を模索していた。加えて、親の会や子どもに関わる人によって、父親自身が支えられていた、と述べている。和田ら(2013)⁸⁾は、父親14名にインタビュー調査を実施し、高機能広汎性発達障害児の父親の心理的な体験過程を明らかにしている。父親は当初、障害を問題としていたが、他児やその親との出会いを通じて、障害を個性とする態度へ移行していた。また、障害や特性に対する悲嘆・不安と期待・安心という両面の感情は、特性が問題となるイベントや子どもの成長等に伴って循環的に移り変わっていた。加えて、ASDに関する知識的な理解と経験的な理解が結びつくことによって、わが子が障害児であることに納得できていた、と報告している。飯田ら(2016)²⁾は、父親1名にインタビューを行い、ASD児の家族のファミリーレジリエンスにおける父親の役割の遂行過程について分析している。父親は診断告知後、子どもの障害に対する葛藤・逃避がみられたが、その後、受容へ切り替えていた。そして、育児負担に夫婦で向き合い、育児における意識の転換を行っていた。また、利用可能な社会資源を活用し、家族の再調整を行い、父親役割を獲得していた、と述べている。藤本(2017)¹⁾は、知的障害のあるASD児の父親1人のライフストーリーから、子どもへの関わり方や障害に対する認識の変化を分析している。その結果、父親は、初めはASDの特徴を表面的に捉えるだけで精一杯だったが、研修会へ

の参加や専門家の助言をきっかけに、子どもの独自の認識や行動世界を理解しようとする方向へ変化していた、と報告している。

以上のように、ASD者の父親の心理的過程、父親の役割や経験の積み上げ等に関する研究はあるものの、知的障害があり、行動問題のあるASD者の父親による家族への関わりに関する研究は、今のところ見当たらない。しかし、行動問題のあるASD者の家族の多くは、毎日のように繰り返される子どもの行動問題への対応に疲弊している。筆者の職場においても、母親一人では対応が難しいため、父親が職場を変えて母親をサポートしている事例や、両親で相談しながら子どもの行動問題への対応を考え、支援ツールを作成している事例もある。このように、家庭において育児の中心である母親に対して、父親の家庭での子どもへの関わりや母親へのサポートは、非常に重要であると考えられる。そこで、本研究においては、知的障害があり、行動問題があるASD者の父親へのインタビューを通して、父親の家族への関わり方の変容プロセスを明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査対象

分析対象者は、2019年8月段階で、知的障害があり、行動問題があるASD者の父親であり、インタビューを用いる半構造化面接を行った。9名中8名は、過去もしくはインタビュー当時、発達障害者に対する支援機関に相談がある、知的障害があり、行動問題があるASD者の父親に協力を依頼した。1名は、市内の障害福祉サービス等事業所の所長から紹介してもらった。インタビューの期間は、2019年8月から2020年3月であり、時間は1人1時間から2時間であった。調査協力者の基本属性については、男性9名で、インタビュー時の年齢は、50代5名、60代4名であった。また、子どもの年齢は、18歳から38歳であった。9名中5名は、市内にある2つの自閉症の親の会に所属していた。

2. 倫理的配慮

調査協力者には、研究目的・個人情報保護・データの取り扱い・同意取り消しの権利について口頭および文書で説明を行い、協力への同意を文

書で得た。また、協力者の了解を得て、インタビュー内容はICレコーダーで録音を行った。分析および調査結果の公表段階において、個人が特定されないように配慮した。

3. 分析方法

本研究では、M-GTA (木下, 2007)⁴⁾ を用いて分析を行った。本研究は、父親と家族との間の相互作用と深く関連し、家族への父親の関わり方の変容プロセスを明らかにすること、その結果から支援のあり方を検討することを目的としている。そのため、相互作用性およびプロセスを構造的にとらえる分析に優れており、実践での応用を意図するM-GTAは、本研究の分析方法として適しているといえる。M-GTAは、分析焦点者と分析テーマを定め、分析を進める。本分析では、分析焦点者を「知的障害があり、行動問題がある18歳以上のASDの子どもの父親」とし、分析テーマを「知的障害があり、行動問題があるASDの子どもの父親による家族への関わり方の変容プロセス」とした。

Ⅲ. 結果

生成した概念は『 』, サブカテゴリーは〔 〕, カテゴリーは【 】, コアカテゴリーは《 》, 語りの引用データは「 」で示す。はじめに分析結果の全体を、分析結果の図 (Fig. 1) とストーリーラインを用いて示す。

子どもが小さな頃から、『不可解な言動への困惑』があった父親は、『専門医療機関に同行する』。自閉症と診断された後、父親は〔母親のきつさに添(う)い〕、〔家族が安定するように動く〕という【父親こそ出来る行為を積む】。また、母親と一緒に〔母親と進める〕に、子どもの〔特性に必要な対応の探求〕をし、〔子どもが落ち着く手立てを講じ(る)〕、〔生活実態に即した関わり方の認知〕をする。この〔特性に必要な対応の探求〕、〔子どもが落ち着く手立てを講じる〕、〔生活実態に即した関わり方の認知〕を繰り返すことによって、【家庭に合った育て方を見出(す)】していく。その一方で、『不可解な言動への困惑』はなかなか解消されることはなく、【閉塞状態による難苦】を経験する。父親は危惧の念を抱きつつ、【父親

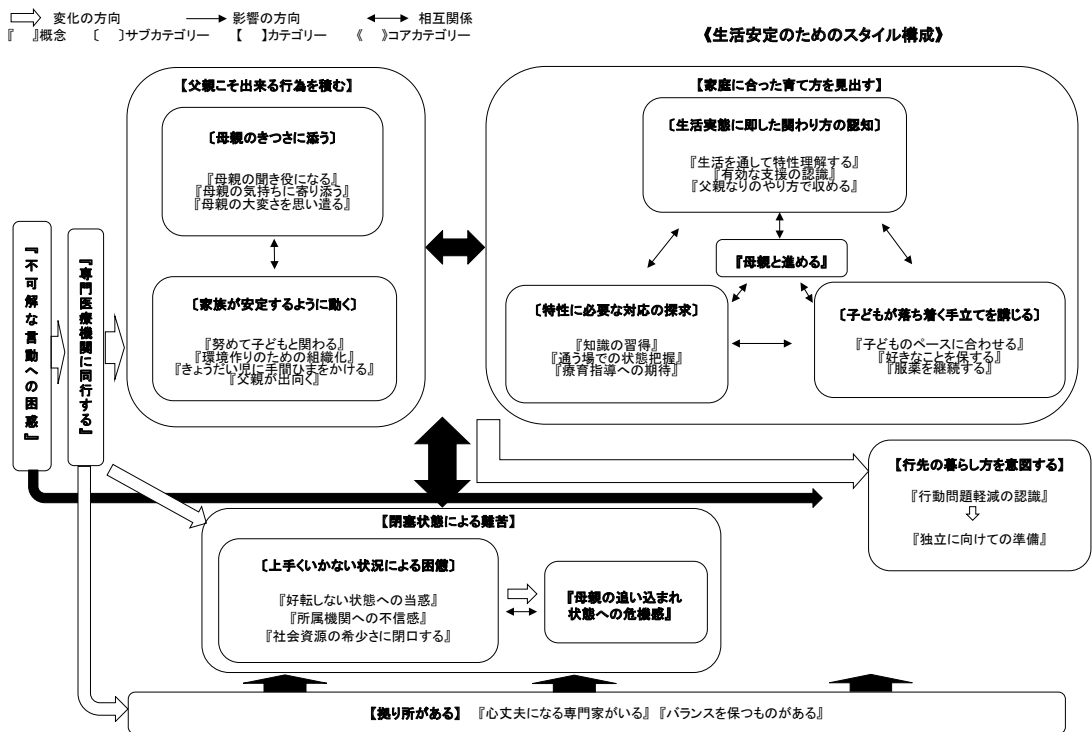


Fig.1 知的障害があり、行動問題がある自閉スペクトラム症者の父親による家族への関わり方の変容プロセス

こそ出来る行為を積む】と【家庭に合った育て方を見出す】を繰り返す、積み上げることによって、【行先の暮らし方を意図する】に至る。知的障害があり、行動問題があるASD者の父親による家族への関わり方のプロセスは、『生活安定のためのスタイル構成』のプロセスである。また、これらは、【抛り所がある】に下支えされていた。

次に見出したカテゴリーごとに、分析結果を説明する。語りデータは、文脈を壊さない程度に読みやすいように一部加筆修正している。

1. 『不可解な言動への困惑』

父親は子どもが小さな頃から、子どもの言動が理解できず、対応に困っていた。

「夜中に起きてテレビを見始めたりとか、自分のお気に入りのビデオを出して入れたりとかですね。この子は何なんだろうというようなことがありましたね」「スーパーとかデパートとかに行った時に、そこで寝転んだりとか、パニックを起こすこともあったし。夜中とかに泣きじゃくったりとか寝付かなかったりとか、そういうことが多々ありました」

2. 『専門医療機関に同行する』

父親は、医療機関や行政機関等から紹介され、障害児専門の医療機関を受診する時、医者から告げられる内容を直接聞くために、母親と連れ立って行く（『専門医療機関に同行する』）。

「病院の受診の時は行ける時は一緒に行ってたし、ましてやRセンターだから、これはもう一緒に行こうねって形で。何か言われるだろうっていうことは分かっていたので」「(かかりつけの先生から)一回Rセンターに相談してみてくださいって言われたんです。で、Rセンターの方に行って、1歳6ヶ月に対する知識やら行動やら色々確認されて、診断があった」

このように父親は、専門医療機関を紹介された時は、子どもについて「何かを告げられる」ということを漠然とではあっても予想しており、父親の意志で、母親と一緒に専門医療機関を受診している。

3. 【父親こそ出来る行為を積む】

専門医療機関を受診し「自閉症」と告げられた

際、父親は少なからずショックを受けるが、育児の大半を担っている母親のストレスを気遣い、母親の愚痴や話を意図的に聞くようにする（『母親の聞き役になる』）。

「話は聞いてましたけどね。こういうことあった、ああいうことあったって。疲れたねって一応頷いて、聞いてたですけれどね」「あったこととか、色々話しますよね。以前に比べたら、話は聞くようにはなったかもしれません」

そして、「正直、違うぜって思うこともありますよね、家内が言っていることが。…(中略)…だけど、一応今は、否定することを言わないように。じゃないと、やっぱり否定されたら、私はこれだけ2時間もしてきたのに、あんたは会社でボーっとしてるのについているのがあるからですね」と語るように、父親の考えとは多少異なっていたとしても、子どもの対応でストレスが非常に溜まっていることを気遣い、『母親の気持ちに寄り添う』ようにする。

また、「(帰宅は)遅かったですね。7時とか8時とか、もっと遅い時もありましたね。ほとんど家にいないような感じで、家内に任せきりだったですね」との語りのように、父親は仕事で日中家にいないことが多いため、一人で子どもに対応している母親の苦勞が並々ではないことを思い遣る（『母親の大変さを思い遣る』）。

「女房がずっと、20キロぐらいのところまで送り迎えしてましたから。一日40キロぐらい走ってて。腕が真っ黒くなっちゃったよ、こっちがって言われて。私は返すことばがなかったです。相当大変だったと思います」「この2時間は家内しかいないんで、家内にずっと同じことを何回も何回も聞いてくるんですよ。…(中略)…それが寝るまでの9時くらいまで続くでしょう」

このように父親は、日々子どもへの対応で疲弊している母親に対しては、[母親のきつきに添う]関わりを行うようにしていた。

その一方で父親は、「休みの日はなるべく僕が対応して、彼女の方をフリーにする形に、出来る限りするようにしてたんですけども」と語るように、母親の育児負担を軽減するために、職場から帰宅後や休日等は『努めて子どもと関わる』ようにしていた。

また、子どもや家族が安心して生活できる環境

を作るために、関係者や親を組織化していた（『環境作りのための組織化』）。

「我々10何人くらいの親のサークル作って、市にこういうシステムを作ってくれとかいう運動をしてました」「みんなでサポートブックの勉強会しようって、みんなでワイワイ言いながらサポートブックを作って。…（中略）…これだけの経験をして、特別支援で関わってもらったので、そのことを保育所の先生方に伝える場を作って」

加えて、「なるべく偏らないようにしてきたつもりですけどね。まあ、溜まってたかもしれんけど。なるべくそうならないようには、してきたつもりですけどね」と語るように、きょうだい児がASD者と自分との親の関わり方の差を感じないように、きょうだい児に対しても、同じように手間ひまをかけて育てていた（『きょうだい児に手間ひまをかける』）。

そして、子どもの所属機関との交渉の際には、意図的に『父親が向う』ようにしていた。「かなりやり手の先生なので、家内はやっぱりどうしても言いたいことが言えないみたいなので、一緒に行こうってことにしました」（「サービスの話をさせていただく時は、私と家内が行っていませんね。その時はやっぱり行った方がいいと私も思いますし」）

このように父親は、家族が少しでも安定するために、父親が出来ることを行い（「家族が安定するように動く」）、〔母親のきつさに添う〕という【父親こそ出来る行為を積（む）】んでいた。

4.【家庭に合った育て方を見出す】

【父親こそ出来る行為を積む】一方で父親は、子どもがASDと診断された後、学習会に参加したり、書籍等を読む等、発達障害に関する知識や対応方法を学ぶ（『知識の習得』）ようになる。

「自閉症とか高機能自閉症、アスペルガーって何だろうって。とにかく知ろうっていうことで、やたら本を買っては夫婦それぞれに必死に読んでましたね」「我々もそういう知識がなかったんで。それから徐々に本とか買って読んだり、テレビとかあったら見たりして」

また、「やはり気になりましたので、行ける時は行くし、その現場を見るっていうことの大切さって意識してましたので」との語りのように、

父親は学校等子どもの所属機関での様子を知ることが大事だと考え、行事や懇談会等に出席し、子どもの様子を父親自身の目で見たり、担任からの話を聞いて把握する（『通う場での状態把握』）ようにしていた。

そして、大学や民間機関の療育場面に父親も同行し、子どもへの有効な対応方法を得たいと期待（『療育指導への期待』）していた。

「親の会が中心で作ったんですけど。S学園の先生方々が、個別指導してくださった」「大学の学生さんがセラピストみたいになって、一緒に色んな遊びとかをやっているのを先生が見て、指導してくれる」

このように、わが子への対応に苦慮している父親は、子どもが安定する関わり方を知りたいと強く願い、〔特性に必要な対応の探求〕をする。

その一方で、「こうなんですってことを、はっきりひとこと言って。彼が納得するまで、ずーっと待ちました」や「学校に行きますかって毎日日本人に確認しては、もう行きませんって言う。じゃあ、今日もうちにしようかって」と語るように、様々な手立てを講じても子どもの状態は進展しないものの、無理強いしても状態が悪化するだけなので、『子どものペースに合わせる』ように関わる。

また、子どもが落ち着くためには、子どもの好きなことをできるように保障する（『好きなことを保する』）ことが大事と考え、可能な限りそのように対応する。

「テレビを見るのが好きです。それと、食べることですよね。あと、2週間に1回のヘルパーさんとの外出」「大体、食べ物のことですよね。何と何と何を食べます、みたいな。買い物に行くとか、…（中略）…この日にこれをしてこうするっていうのが、やはり楽しいことだと思います」

加えて、「精神の安定剤は減らしたら悪くなったとか言ってたので、効果はあるのかなと。まあ、仕方がないですね」との語りのように、父親は薬物に対する抵抗感があるものの効果もみられるため、服用を続けていた（『服薬を継続する』）。

このように父親は、子どもや家族が安定して生活するためには、〔子どもが落ち着く手立てを講じる〕ことが重要だと認識し、そのように行動する。

そして、毎日子どもと一緒に生活する中で、子どもの持つASDの特性を、体験を通して理解していく（『生活を通して特性理解する』）。

「物が気になるみたいで。シャンプーとか洗剤とかが減ると気になるみたいで、水を薄めて一杯にして。変化が駄目みたいですね」「字が書いてある物を、子どもは小さい頃は逆さに見たりとか、横から見たりとかするじゃないですか。それをまっすぐ、その通りの方向で見て書いてましたから、3つくらいからですね。すごいなと思いましたよ」

また、父親が習得した知識に基づいて実際に家庭で取り組むことで、わが子への有効な対応方法を段々と理解していく（『有効な支援の認識』）。

「視覚支援は絶対ですよ。やっぱり、スケジュールで先の見通しをつけるっていうのは絶対必須ですね。それがないと生活にならない」「どこかに行きたい時は、色んな行き先の写真があって、それを自分で貼って、行かせてくださいとか」

加えて、「(ショートステイの日程を) その方に相談して、1週間くらい前に言ったらどうかってことでやってみた。そしたら、かえってそのことばかり気にして、わちゃわちゃ言い出したんですけれどね」と語るように、専門家から助言を受けて、家庭で実践してみてもうまくいかない場合、正しくない対応と指摘されるかもしれないが、目の前で行動問題を起こしている子どもに対して、『父親なりのやり方で収め(る)』ていた。

このように父親は、[特性に必要な対応の探求]を行い、[子どもが落ち着く手立てを講じ(る)]つつ、子どもと関わる日々の積み重ねを通して、[生活実態に即した関わり方の認知]をしていく。この[特性に必要な対応の探求]と[子どもが落ち着く手立てを講じる]、[生活実態に即した関わり方の認知]を何度も繰り返すことによって、父親は自分の【家庭に合った育て方を見出す】ようになる。

また、それは、「子どもに対する対応を今後どうすればいいのかとかいうことは、一生懸命二人で話をしたと思います」や「私一人では判断できないし、二人でこうだよね、ああだよねって言いながら、一つ一つ選んできた」との語りのように、父親は子どもの対応や進路等重要なことは、常

に母親と相談しながら進めていた（『母親と進める』）。

5.【閉塞状態による難苦】

しかし、家庭の中で色々な手立てを講じても、子どもの状態が仲々好転しないため、父親は途方に暮れる（『好転しない状態への当惑』）。

「自閉症の勉強は、とにかくすぎるような感じで、本を読み始めてましたけど。実際の子育てでは、どこに行ってもうまくいかないことの連続だったので、もうどん底だったと思います」「自傷をやったりとか、壁を殴ったりとか蹴ったりとか、ぶつかったりとか、…(中略)…それが年齢と共に段々激しくなるっていうのはありましたね」

また、「(そこは) かなり強引な手法だったんですが、学習効果が表れなくて、子どもも随分辛い思いをしたんじゃないかと思います。…(中略)…で、かなり人格が変わって、目もトロンとして。それでも、パニックを起こしていた」や「よくしてくれる先生ならよかったですけど、悪い先生に当たると機嫌が悪い。それでおかしかった時がありましたね」との語りのように、所属機関が子どもにとって適していない対応をすると、子どもの行動問題が悪化するため、父親は、所属機関や担当者に不信感を持つようになる（『所属機関への不信感』）。

加えて、「こういう子どもが受け入れられるグループホームが、今のところないですよ。…(中略)…どっぷり生活介護が必要な人は、ちょっとここは駄目ですってなってしまう」や「何かあった時に預かってくれるところがほしい。特にうちの子みたいに大人しくない子は、色々理由付けられて、駄目ですとか言われるんで」と語るように、子どもが利用できる『社会資源の希少さに閉口する』。

このように、様々な場面で上手くいかないことが多く、父親は、非常に苦しい状況の日々を送っていた（『上手くいかない状況による困憊』）。

また、子どもの状態が好転しない状態が長く続くと、子育ての大半を担っている母親は、段々と精神的・肉体的に追い込まれていく。そして、その様子を身近で見ている父親は、母親の状態に対して危機感を持つようになる（『母親の追い込まれ状態への危機感』）。

「一時期、精神科のクリニックにも通いましたものね。投薬もしばらく受けてた時期があります」「彼女に相当なプレッシャーと労力というか、過労というか、そういうものが発生したんだと思いますよ。だから、これはまずいと思った」

このように、父親は、「(体力的・精神的に)限界を感じますよね」や「どうしていいかわからなかった。本当、その時が一番苦しかったですね」との語りのように、【閉塞状態による難苦】を経験する。

6. 【抛り所がある】

父親は、子どもの所属機関や民間療育機関等で、信頼できる専門家と出会うことによって、安心感を得る（『心丈夫になる専門家がいる』）。

「自分達親子の居場所をそこで初めて見つけたような、それは強烈な印象があるんですよ」「その先生が彼のコミュニケーションの手段を見つけて、適切に対応してくれたっていうのが、僕の頭にはすごく大きくってですね」

また、「僕、テニス好きだったんで、テニスだけはちょっとやってました」や「仕事をして、そこでバランスを取ってたってことじゃないかな。趣味はインドアだから、家で子どもが邪魔しながらも、本を読んだり是可以ので」との語りのように、子どもの状態が仲々良くならず、鬱屈した日々を送っている中で、仕事や趣味等で父親自身の精神的バランスを保っていた（『バランスを保つものがある』）。

このように【抛り所がある】ことが、「よくここに来ましたねって迎えてくれたので、ホッとしたのを覚えてます」「大学に関わってもらって、私は非常に恵まれていました」と語るように、精神的・肉体的に疲れている父親を下支えしていた。

7. 【行先の暮らし方を意図する】

父親は、【父親こそ出来る行為を積む】と【家庭に合った育て方を見出す】を、何度も繰り返していくうちに、子どもは行動問題があるものの、以前よりも良くなっていると認識するようになる（『行動問題軽減の認識』）。

「調子悪いことはほとんどないです。今は叩かない」「(事業所では)色々あるみたいですけど。

家では、落ち着いていますね」

そして、「彼が自分の家以外のところで泊まったり、穏やかに生活できるための訓練の意味で、ショートステイはやってます」や「親との距離を離していく。親以外の人と、あの子自身が関わっていく。…(中略)…あの子自身に直接関わってくれる支援者を、周りに増やしていく」と語るように、子どもが親と離れた生活を送ることに向けて、ショートステイやヘルパー利用等を意図的に行う（『独立に向けての準備』）ようにする。

このように父親は、「あの子が自立して生活できる、そういう環境を作っていけないといけないなって。2年ぐらい前から、そういうことを考えるようになった」との語りのように、子どもの【行先の暮らし方を意図(する)】して、準備を進めていた。

IV. 考察

本研究は、知的障害があり、行動問題があるASD者の父親へのインタビューを通して、父親による家族への関わり方の変容プロセスを明らかにすることが目的であった。M-GTAを用いた分析の結果から、以下の点が明らかになった。

1点目は、父親による家族への関わり方のプロセスは、《生活安定のためのスタイル構成》プロセスであるといえる。《生活安定のためのスタイル構成》とは、子どもがASDと診断された後、父親が【父親こそ出来る行為を積む】と【家庭に合った育て方を見出す】を繰り返し行う中で、家族が安定した生活が送れるように、それまでの父親の考え方や行動の仕方を変容し、組み立てていくプロセスであった。

先行研究において飯田ら(2016)²⁾は、父親は子どもが自閉症と診断された後、育児に対する意識転換を行い、父親の役割を獲得し、家族がやすらぐ場の確保やきょうだい関係の調整等を行っていたと述べている。また、今西(2013)³⁾は、父親は子どもと向き合う中で育児姿勢を変化させ、また、父親自身を柔軟的に変化させ成長していたことを報告している。本研究の結果の【父親こそ出来る行為を積む】は、これらの先行研究と近似しているといえる。しかし、本研究の結果からはさらに、父親は【家庭に合った育て方を見出す(す)】していたことが明らかになった。父親の子どもに

対する『不可解な言動への困惑』は、時期によって差があるものの、子どもの年齢が上がっても、完全に解消されることはほぼない。そのため、知的障害があり、行動問題があるASD者とその家族が安定した生活を送るためには、子育ての大半を担っている母親と協力しながら、行動問題を軽減する手立てを見出していくことが必要となる。そしてそれは、それぞれの家庭の実態に合った手立てでなければ有益ではなく、継続が難しいといえる。そのため、【家庭に合った育て方を見出す】ことは、ASD者とその家族が安定した生活を送るためには、必要不可欠であった。

2点目は、《生活安定のためにスタイル構成》はすぐに作り上げられるものではなく、【父親こそ出来る行為を積む】と【家庭に合った育て方を見出す】を繰り返して行い、また、【閉塞状態による難苦】を行ったり来たりしながら、長い時間をかけて組み立てられるものであった。また、それは、【抛り所がある】に下支えされていることが明らかになった。先行研究において飯田ら(2016)²⁾は、親同士の親睦や育児を相談する場の確保を行うことで、安心して過ごす実感を得ていたことを報告している。また、今西(2013)³⁾は、「(父親の)多くの葛藤は、親の会やその会のピュアメンバー、子どもに関わる人々によって支えられていることがわかった」と述べている。本研究においても、父親は【閉塞状態による難苦】を経験するたびに、『心丈夫になる専門家がいる』ことで支えられていた。しかし、本研究の結果からはさらに、父親は『バランスを保つものがある』ことが明らかになった。子どもの行動問題への対応で疲弊している父親にとって、『バランスを保つものがある』ことは、《生活安定のためのスタイル構成》を継続するための重要な要因であった。

V. まとめ

本研究の結果を踏まえ、支援の提言を述べる。

1点目は、父親は【抛り所がある】ことに下支えされていた。そのため、担任や担当者は、知的障害があり、行動問題があるASD者への指導・支援方法の習得と、社会資源の情報を収集しておくことが必要である。2点目は、父親は、〔生活実態に即した関わり方の認知〕をしていた。その

ため、担任や担当者は、専門的立場からの助言であっても、家庭という環境の中ではその助言の実行が難しい、あるいは、家族にとっては有益ではないことがある、ということを確認しておくことである。従って、それぞれの家庭の人的・物理的環境の中で、実行可能な対応は何なのかを追求していくことが必要である。

文献

- 1) 藤本倫 (2017) 我が子の「障害」に対する父親のまなざしの変化：父親の語りに基づく検討. 國學院大學北海道短期大学部紀要, 34, 73-104.
- 2) 飯田直美・二宮一 ((2016)自閉症児を抱える家族のファミリーレジリエンスにおける父親の役割. インターナショナルNursing Care Research, 15 (2), 93-102.
- 3) 今西良輔 (2013) 発達障害児を育てる父親の生活体験—3人の父親と息子達の歩み—. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 9 (1), 27-34.
- 4) 木下康仁 (2007) ライブ講義M-GTA—実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂.
- 5) 黒木八恵子 (2020) 知的障害があり、行動問題がある自閉スペクトラム症者への母親の関わり方変容プロセス研究—母親へのインタビューを通して—. 福岡教育大学教育総合研究所附属特別支援教育センター研究紀要, 12, 13-22.
- 6) 三原博光 (2004) 自閉症者の家族の心理的考察—2人の自閉症者を持つ父親の事例を通して—. 山口県立大学社会福祉学部紀要, 10, 105-112.
- 7) 岡野維新・武井祐子・寺崎正治 (2012) 広汎性発達障害児をもつ母親の育児ストレスと父親の母親に対するサポート. 川崎医療福祉学会誌, 21 (2), 218-224.
- 8) 和田浩平・林陽子 (2013) 高機能広汎性発達障害児をもつ父親の心理的体験過程について. 小児の精神と神経, 53 (2), 137-148.
- 9) 柳澤亜希子 (2012) 自閉症スペクトラム障害児・者の家族が抱える問題と支援の方向性. 特殊教育学研究, 50 (4), 403-411.